

マルコ14章12-25節 「過越の食事と交わり」

1A 過越の食事の準備 12-16

2A 裏切り者 17-21

3A 主の体、流される血 22-25

本文

マルコによる福音書 14 章を開いてください。今日は、12 節から 25 節までにある、「最後の晩餐」と呼ばれる箇所から、イエス様の思いを探っていきたいと思います。このマルコの書いた箇所だけでなく、他の箇所も見ながら探っていきたいと思います。

1A 過越の食事の準備 12-16

14:12 種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊をほふる日に、弟子たちはイエスに言った。「過越の食事をなさるのに、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」14:13 そこで、イエスは、弟子のうちふたりを送って、こう言われた。「都にはいりなさい。そうすれば、水がめを運んでいる男に会うから、その人について行きなさい。14:14 そして、その人がはいつて行く家の主人に、『弟子たちといっしょに過越の食事をする、わたしの客間はどこか、と先生が言っておられる。』と言いなさい。14:15 するとその主人が自分で、席が整って用意のできた二階の広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をしなさい。」14:16 弟子たちが出かけ行って、都にはいると、まさしくイエスの言われたとおりであった。それで、彼らはそこで過越の食事の用意をした。

過越の小羊を屠る日、という言葉が出てきます。最後の晩餐というのは、過越の食事と呼ばれるものの一番であります。

ところで私たちは来週の日曜日、復活祭を祝います。イエス様が十字架で死なれ、三日目によみがえられたことを記念する日です。この前の日曜日は、棕櫚の聖日と呼ばれる日でした。イエス様がろばの子に乗って、エルサレムに入城された時でした。群衆は、「ホサナ、主の御名によって来られる方に」と言って叫びました。それは、彼らの待ち望んでいた救世主、メシヤが来られたことを喜んで迎えたのです。当時のユダヤ人の状況は、とても難しいものでした。ユダヤ人は、長いこと異邦人の支配の中で圧迫されていました。ローマの権力によって押しつぶされていました。けれども、ローマの支配を受けつつも、反抗さえしなければ神殿で礼拝を守ることについて、ローマは許していました。神殿の敷地の横には、「アントニオ要塞」という監視所があり、そこからローマ兵がユダヤ人たちの礼拝の様子を上から監視することができました。そして何か騒動が起これば、飛び出して取り押さえることができます。

ユダヤ人の歴史は、異邦人の圧迫から解放されることから始まりました。エジプトにおいてイ

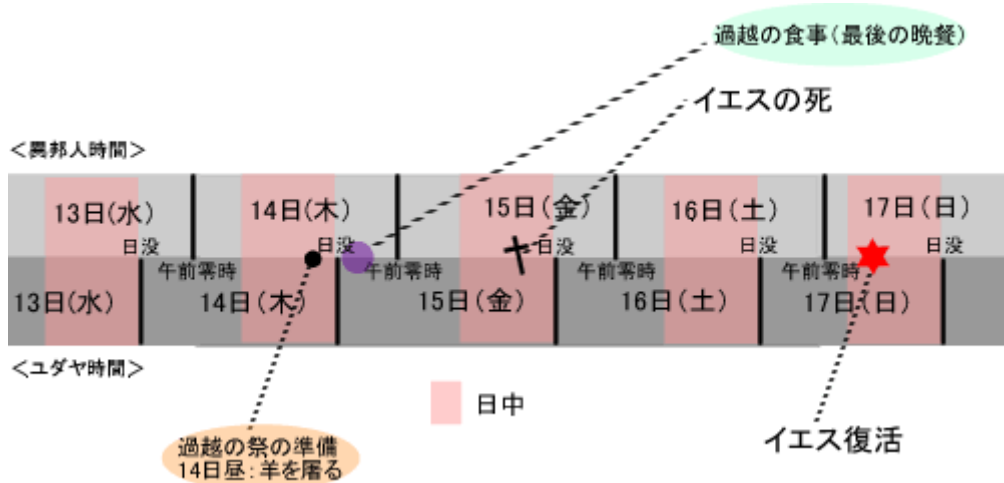
イスラエル人が、奴隷の身で苦しんでいたところ、神がモーセを立ててくださいました。モーセが主の言葉、「わたしの民を出ていかせなさい。」とパロに話したのです。それをパロが拒むごとに、力強く働かれて、災いが地上に降りました。九つ下りましたが、それでもパロは言うことを聞きませんでした。それで、主はこう言われたのです。「出エジプト 11:5-6 エジプトの国の初子は、王座に着くパロの初子から、ひき臼のうしろにいる女奴隷の初子、それに家畜の初子に至るまで、みな死ぬ。そしてエジプト全土にわたって、大きな叫びが起こる。このようなことはかつてなく、また二度とないであろう。」エジプトの初めに生まれた男の子、家畜の場合は雄がみな殺されるというのです。けれども、イスラエル人には何一つ、その災いが下らないと主は言われました。

そして、イスラエルはその夜に出ていきます。けれども主は、その時のことをずっと思い出してもらいたいと願われて、「過越の祭り」を祝うように命じられました。それは出エジプト記 12 章に書いてあります。2 節から 14 節までを読みます。

2 「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ。3 イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。4 もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。5 あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。6 あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会が集まって、夕暮れにそれをほふり、7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。8 その夜、その肉を食べる。すなわち、それを火に焼いて、種を入れないパンと苦菜を添えて食べなければならない。9 それを、生のままで、または、水で煮て食べてはならない。その頭も足も内臓も火で焼かなければならない。10 それを朝まで残してはならない。朝まで残ったものは、火で焼かなければならない。11 あなたがたは、このようにしてそれを食べなければならない。腰の帯を引き締め、足に、くつをはき、手に杖を持ち、急いで食べなさい。これは主への過越のいけにえである。12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは主である。13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。14 この日は、あなたがたにとって記念すべき日となる。あなたがたはこれを主への祭りとして祝い、代々守るべき永遠のおきてとしてこれを祝わなければならない。

エジプトから出ていく時に、それぞれの家で食事をするように神は命じられました。それは、神の贖いを表していました。贖いとは、「本当は滅びないといけないのに、神が犠牲を払って私たちを匿い、救い出してください、そしてご自分のものとしてくださる。」ということです。火山の噴火で、迷子になった小さな子どもを誰かが覆いかぶさって匿い、救い出し、そしてその親は死んでしまった

ので、引き取って自分の子として引き取り、育てるようなものです。神は、子羊をそれぞれの家で用意しなさいと命じられました。それは、体に傷があってははいけません。それを火で焼いて食べます。その時に、パン種、すなわちイースト菌の入っていないパンをいっしょに食べます。このような儀式を行って、それで出ていきなさいと言うのです。



その小羊は、屠られる時にその血は 7 節を読むと、「二本の門柱と、鴨居に付ける」とあります。そして、エジプトに対して主が、すべての初子を打たれる時に、死の御使いがそれぞれの家にやって来て殺す時に、家にその血が付けられていれば、その家を過ぎ越すと神は約束してくださいました。したがってイスラエルの家では、そこにいる長男は、子羊の流した血によって、死を免れて救われるのです。そして、夜、エジプト中に泣き叫びが起こりました。それは、男の子が死なないでいる家がなかったからです。そこで、エジプトの王パロは、無理やりにもイスラエル人をエジプトから出させたのです。

ですから、イスラエルの民にとって過越の祭りは、異邦人の支配や虐げから解放される儀式でありました。それで、過越の祭りを守るために全国からユダヤ人がエルサレムに集まって来ますが、その時に神の国がこの時にできるのではないかと期待、この時に救世主、キリストが到来してローマを打ち倒し、神の国を立ててくださるのではないかと期待を抱いていたのです。それで、イエス様がエルサレムに入城する時に、群衆が歓喜してこの方をメシヤとして迎え入れた時に、騒動が起こるのではないかと心配していたのが、実はローマ以上に、ユダヤ人の宗教指導者でした。

なぜなら、宗教指導者はローマに歯向かったなら、自分たちの神殿礼拝をやめさせられ、自分たちがローマによって潰されてしまうのではないかと、そして追放されるのではないかと恐れたからです。すでに大祭司カヤパが、サンヘドリンというユダヤ人議会で、この男を殺すための陰謀を企てていました。一人の犠牲は、国民と土地をローマに奪い取られることよりも得策であると、彼は

¹ <http://jspiritministries.com/Passover.html>

話したのです(ヨハネ 11:47-53)。他にも、宗教指導者がイエスを殺そうと思っている理由がありました。自分たちの律法の解釈を真っ向から破ったこと、この方が自分たちの心の内にある悪を暴かれたこと、そして自分たちの支配している民がイエス様のほうに動いていったことに対する妬みがあったこと、いろいろな理由がありました。

過越の祭りの話に戻りますが、なぜエジプトから出る時に、わざわざ小羊をほふり、その血を家に付けるようなことを神はさせたのでしょうか？これは、犠牲の子羊です。人の反抗に対する、神の裁きに対する対価です。神が初めに、この木から取って実を食べたら必ず死ぬと言われたその木から実を取って食べて以来、人は死ななければいけない存在となりました。しかし神は、人に生きてほしいと願われました。しかしその罪への対価が必要です。死を伴う対価として、神はいけにえを備えられました。その罪を犯した者が死ぬ代わりに、その動物が屠れ、血を流すことによって人の罪を洗い清め、罪を赦すことを定められたのです。したがって、イスラエル人が神の怒りの現れであった、エジプトの初子の死は、犠牲の子羊の死によってイスラエルの子たちには過ぎ越されたのです。聖書には、「血を流すことなしには、罪の赦しはありません。」とあります。犠牲の血によって、私たちの罪は心から取り除かれます。

けれども、なぜ子羊を焼いて食べるようなことをしたのでしょうか？この初めの過越の祭り以降、例年、第一の月の十四日に羊を屠り、その夜に食べなさいと主は命じておられますから、彼らは食事をしながらこのことを記念していました。実は、聖書には数多く、食事をするのが書かれています。イエス様は、パリサイ人と食事をされたことが多くあります。また、弟子たちとは生活を共にしておられましたから、毎日のように食事をしておられました。そして、イエス様は食事によって、神の国とはこのようなものであるというたとえを数多く行われました。放蕩息子は、再び迎え入れられ、大いに祝宴をしようではないかと父が喜びました。神の国では、アブラハム、イサク、ヤコブもいて食卓に着いて、お祝いをするのも教えられました(マタイ 8:11)。ラオデキアにある教会に対して、熱心に悔い改めなさいと勧め、そしてあなたが戸を開けるなら、わたしは入ってあなたと食事をすると言われました(黙示 3:20)。

なぜ、こうも多く食事をするのか？それは、「**一つとなる**」ためです。過越の子羊と一つとなるために、その肉を食べるのです。その流された血が、まさに自分に直接関わるものであることを知るため、その肉を食べたのです。食べることによって、体内に入ることによって、確かにわたしは、子羊の血の犠牲によってエジプトから贖い出されたのだということを体験できるのです。ですから、神の備えてくださった救いと自分を一体化させるために食べます。そして、共に家族で同じ子羊を食べますが、それによって自分は神の運命共同体なのだ、我々も主なる神にあって一つにされているのだ、ということを実感するのです。

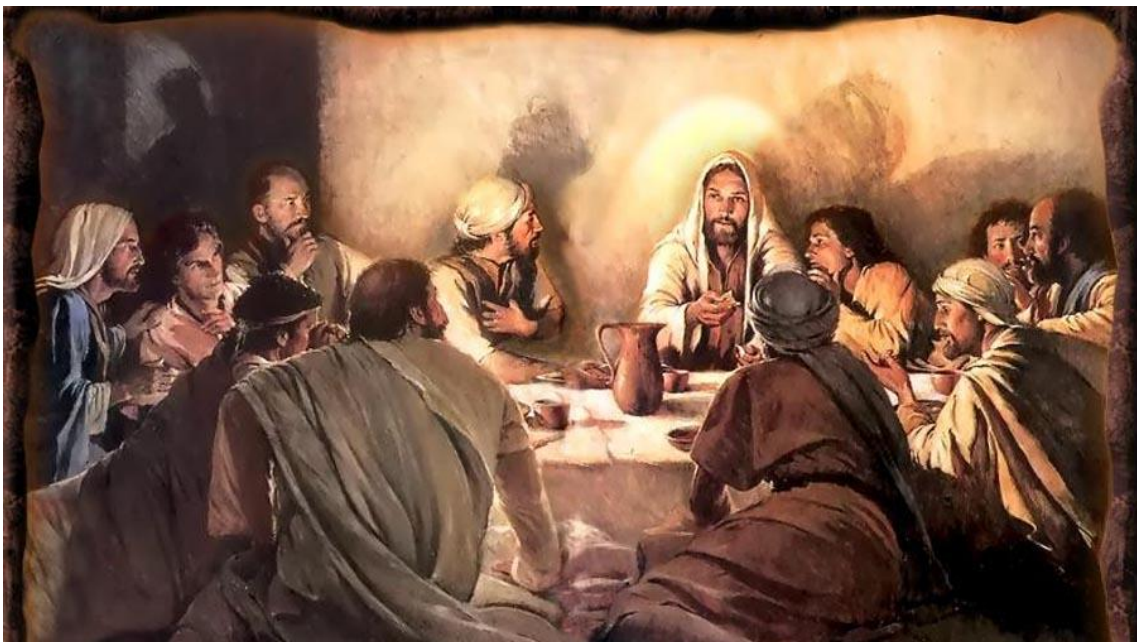
それでこれから、イエス様は弟子たちと食事をされるということは、とてつもなく特別なことでした。主はこの食事を取られて、その後すぐにユダヤ当局に捕えられることとなります。そして、サンヘド

リンにて死刑宣告を受けます。ユダヤ人には死刑を執行する権威がローマによって、その時は剥奪されていましたから、彼らはローマ総督ピラトのところにイエス様を連れて行き、十字架刑を執行させることに成功するのです。イエス様はルカ 22 章 15-16 節では、こう言われました。「イエスは言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をするをどんなに望んでいたことか。あなたがたに言いますが、過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません。」主にとっては、ご自分が死なれる前の最後の弟子たちとの食事になるのです。

2A 裏切り者 17-21

したがって、この食事が始まって少し経ってから、ここには属してはならぬ者が出て行きました。

14:17 夕方になって、イエスは十二弟子といっしょにそこに来られた。14:18 そして、みなが席に着いて、食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。」14:19 弟子たちは悲しくなって、「まさか私ではないでしょう。」とかわるがわるイエスに言いだした。14:20 イエスは言われた。「この十二人の中のひとりで、わたしといっしょに、同じ鉢にパンを浸している者です。14:21 確かに、人の子は、自分について書いてあるとおりに、去って行きます。しかし、人の子を裏切るような人間はのろわれます。そういう人は生まれなかったほうがよかったです。」



今、弟子たちが席に着いています。私たちがしばしば目にする、レオナルドダヴィンチの「最後の晩餐」の絵は、全く間違っています。当時のユダヤ人たちは、私たち日本人と同じような、低いテーブルで食べていました。そして、寝そべて左肘で体を上げて、右手で食べていました。そのゆったりとした姿は、ユダヤ人がエジプトの奴隷状態から解放されて、自由人になったことを表しています。奴隷状態の時は、そんなことはできなかったからです。

そして食べる時には、ナイフやフォークもありません。パンがあれば、それは大きなものを裂いて、同じパンを分けて食べていました。ぶどう酒もその食事の中で合計、四杯飲むのですが、一つの杯を回して飲んでいました。子羊を食べる時も、その油で汚れた手はパンで拭いていました。このように、衛生的には必ずしも良い状態ではないですが、しかしそこにある一体感はかけがえのないものなのです。

この時にイエス様が、「あなたがたのうちのひとりで、わたしといっしょに食事をしている者が、わたしを裏切ります。」と言われます。弟子たちが驚き、まさか自分のことではないかと嘆いていますが、この様子を見ると誰も、イスカリオテのユダであることが分かっていません。マタイによる福音書を読むと、「先生。まさか私のことではないでしょう。」とイスカリオテのユダがしらばっくれます。けれどもイエス様は、「いや、そうだ。」と言われます(26:25)。ヨハネによる福音書を見ると、もっと詳しいやり取りをヨハネは書き記しています。「13:26-28 イエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリテ・シモンの子ユダにお与えになった。彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼にはいった。そこで、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。」席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。」誰も、その会話の中身の意味している所は分からないほどでした。ヨハネとペテロは、何となくイスカリオテのユダではないかと察したようなのですが、それでもはっきりしていませんでした。

これは、とても興味深いです。人の心の闇を見させられます。イスカリオテのユダは、表向きは他の十一人の弟子たちと変わりありませんでした。しかし、彼の心はおそらく次第に主から離れていったのだと思われます。この方がキリストであることを知って、弟子たちはイエスに付いていました。けれども、イエス様は、「わたしは異邦人に引き渡され、十字架に殺されて、そして三日目によみがえる。」という言葉語り続けていました。その意味する所は弟子たちには分かかっていませんでした。

ある日、彼がイエスに離反する決定的な出来事が起こります。それは、この過越の日の六日前に、女が高価な香油をイエス様に注いだ時のことです。イスカリオテのユダが、「なぜ、この香油を三百デナリで売って、貧しい人に施さなかったのか。(ヨハネ 12:5)」と言いました。他の弟子たちも、その通りだと言いました。けれども、ユダは実はもっと深い意味を持っていたのです。使徒ヨハネはこう記しています。「12:6 しかしこう言ったのは、彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである。」そしてイエス様が、その女のしたことを擁護され、「わたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです。(12:7)」と言われたのですが、それでユダは祭司長たちのところに行って、「彼をあなたがたに売るとしたら、いったいいくらくれますか。」と尋ねて、それで銀貨三十枚を受け取ったのです(マタイ 26:14-15)。

これから後で、残りの弟子たちもイエス様がユダヤ人に捕えられてから逃げてしまいます。ペテ

口は、イエス様を知らないと言ってしまう、激しく泣きます。この方を裏切ってしまったことに対する激しい後悔で嗚咽したのです。しかし、ペテロのこのイエス様否定は、他の弟子たちも聞かせるようなところで、はっきりとイエス様は語ってしまわれます(ヨハネ 13:38)。彼の罪は大きいものでしたが、しかし、イスカリオテのユダの裏切りとは違って奥深くないのです。明らかにされ、それではっきりとその過ちを犯し、そしてはっきりと悔い改めていたのです。

人の心の闇というのは、それが闇ということを見せないほど深く、奥に入り組んでいます。そして、そのことを自分の罪として認めず、その悪を愛してやまず、それゆえ光のところに来ようとしません。そのような者に、イエス様は最善の働きかけを行われました。罪をあからさまに出すのではなく、その隠れている罪を本人にしか分からない方法で、それで悔い改めに促そうとされていたのではないかと思います。イスカリオテのユダは、イエスに対して口づけをすることによって、それが合図で群衆が来て、イエス様を捕えましたが、その時にイエスはユダに、「友よ。何のために来たのですか。(マタイ 26:50)」と言われ、そして、「ユダ。口づけで、人の子を裏切ろうとするのか。(ルカ 22:48)」と言われました。この言葉でユダが後悔します。しかし、彼の心は悔い改めに向きませんでした。そうではなく、共謀した者のところに行き、その銀貨を投げ捨てて、それから首をつって死ぬのです。神のところに、その心は最後まで開かなかったのです。

イスカリオテのユダの心は、使徒ヨハネが3章で次のように語ったようになっていました。「3:19-21 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」最後の 19 節に希望があります。私たちは、キリストに触れるなら、そこに自分の罪が照らし出されます。そのまま出ていき、主の前に告白するのです。そうすれば、主は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての不義から私たちを清めてくださいます(1ヨハネ 1:9)

3A 主の体、流される血 22-25

14:22 それから、みなが食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福して後、これを裂き、彼らに与えて言われた。「取りなさい。これはわたしのからだです。」14:23 また、杯を取り、感謝をささげて後、彼らに与えられた。彼らはみなその杯から飲んだ。14:24 イエスは彼らに言われた。「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。」14:25 まことに、あなたがたに告げます。神の国で新しく飲むその日までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません。」

イエス様との食事には、イスカリオテのユダのように、どんなに一緒にこれまで時間を共にしてきたとしても、真の交わりがなければ出ていかざるを得ない性質のものであります。しかし、イエス様は、ご自分と食事を共にされる者に対しては、どんな深い交わりよりも一つにさせる結びつきをお

与えになりました。

ヨハネの福音書 13 章では、イスカリオテのユダが去っていった後に、イエス様は、弟子たちにご自分のありったけの言葉を語られます。「人の子が栄光を受ける時が来た。」と語られました。そして、イエス様は「これから、わたしは去っていくが、わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。わたしが愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」と言われました。去っていくと聞いた弟子たちが悲しくなりましたが、イエス様は「心を騒がせてはいけません。神を信じ、わたしを信じなさい。わたしは父のところで、あなたがたに住まいを備え、そして戻ってきます。」と言われました。それでも不安な弟子たちに、「わたしが道であり、真理であり、命です。」また「わたしを見た者は、父を見たのです。」と言われました。そこで父なる神とご自分が一つであること、その交わりの中に弟子たちを招いていることを話されました。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。(ヨハネ 14:23)」そして、イエス様がいなくなっても、もうひとりの助け主、聖霊を遣わしてくださると約束されました。最後に、主は父なる神に祈りを捧げられます。弟子たちが、神の御名の中で守られて、どんな敵が来ても滅ぼされることはないこと。そしてご自身を信じる者たちが、父なる神と御子の交わりの中で一つになることを祈られました。

このような、ありったけの交わりを主は、聖餐にあずかる弟子たちに約束してくださったのです。その基となっているのが、ここで主が語っておられる、「わたしのからだ」そして「新しい契約の血」であります。

イエス様が裂かれたパンは、過越の食事においてアフィコメンと言います。前もって、三枚に重ねられた種なしのパン(マツァ)の中から真ん中のマツァを取り、それを二つに割って(裂いて)、一方を布に包んで置きます。それを食事の後に取り出します。なぜ三つのマツァなのか?なぜその真ん中だけを裂いて、後で取り出すのか?ユダヤ教の伝統では答えはできませんが、私たちは三位一体の神であることを知っているのです。第二位格であられる子なるキリストが、人として来られて、その肉体が裂かれます。けれども、また見出される、つまり甦るのです。

イエス様は、出エジプトを思い出す、その種なしパンに、新しい意味を付けられました。その裂かれるのは「わたしのからだ」だということです。パン種は罪を表していますが、罪なき体が私たちの咎のために代わりに砕かれたのです。「イザヤ 53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」その体を食べるというのは、イエス様が鞭打ちで砕かれたその体はまさに、私の咎のためなのだ、ということを知ることです。私たち自身が受けなければいけない罰を、この方が受けてくださったので私たちの魂に平安が与えられ、時に肉体にも癒しが与えられます。

- 「ペサハ」の概要(式次第=「ハガダー」)

1. 前半(儀式的な食卓)

- (1) 蠟燭の点火と祈り
- (2) 子どもの祝福(父親が子どもたちを祝福します)
- (3) 最初の杯が満たされ、回し飲みされる。
- (4) 水差しで両手を洗い、野菜を塩水に浸す(塩水はユダヤ人の苦難の歴史を意味する)。三枚に重ねられた種なしのパン(マツァ)の中から真ん中のマツァを取り、それを二つに割って(裂いて)、一方を布に包んで置きます。
- (5) 二杯目の杯が満たされ、回し飲みされる(ルカ 22:17)、エジプトでの苦難の歴史が語られる。
- (6) 詩篇 113 篇と 114 篇が食前の祈りとして唱えられる。
- (7) 再度手を洗い、マツァが割られて配られ、各自それを取り(ルカ 22:19)、苦菜をドレッシングに浸し、マツァと重ねられる。
 - これらを口にするのは、食事の儀式に従ってその都度一斉に行われる。

儀式的な食事はここで**中断**し、夕食をくつろいだ雰囲気の中に楽しむ。

2. 後半(儀式的な食卓)

- (1) 食事の後、第三の杯が満たされ(ルカ 22:20)、感謝の祈りがささげられる(かなり長い)。
- (2) 第四の杯が満たされ、詩篇 115、116、117、118 篇、および詩篇 136 篇を食後の祈りとして唱える。
- (3) 「来年こそはエルサレムで」(離散ユダヤ人のためのもの)
イスラエル在住者は再建されたエルサレムで」と唱和して式は終わる。²

そして、イエス様は、「これはわたしの契約の血です。多くの人のために流されるものです。」と言われました。これはルカの福音書では、新しい契約と書いてあります。新しい契約というのは、イスラエルの民にとってはすでに約束されていたことでした。「エレミヤ 31:31-34 見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、イスラエルの家とユダの家とに、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を握って、エジプトの国から連れ出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破ってしまった。…主の御告げ。…彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。…主の御告げ。…わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。そのようにして、人々はもはや、『主を知れ。』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。…主の御告げ。…わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

² <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E9%81%8E%E8%B6%8A%E3%81%AE%E9%A3%9F%E4%BA%8B>

どんなに律法に聞き従おうとしても、その心が頑なになっていて神に反逆していたイスラエルの民です。しかし、神は預言者エゼキエルによると、石の心を肉の心にするために御霊を注いでくださると約束されました。神ご自身の御霊で私たちの心が新たにされて、それで神の命じられることが石の板ではなく、心の板に書き記されるようになります。その契約をイスラエルと結ばれるにあたって、ご自身の血によってその契約の印とするとされたのです。キリストが流された血によって、私たちの良心は完全に清められ、それで御霊による新生で私たちは新たな歩みをするができます。

ですから、イエスの体が碎かれることによって、魂に平安と癒しが与えられた人々、この方の血潮によって新しい契約を結び、御霊によって新しくされている人々、この人々の中に私たちは交わりが保たれています。交わりには、いろいろな食事がありますが、主が死なれる前に最後に持たれた食事は、ご自身の死にあずかる食事なのです。そして、主が、神の国において再びぶどう酒を飲まれると言われていますが、主が再び来られる時までは、主の死にあずかる食事を私たち信者が共にあずかります。この堅い結びつきの中に私たちは、互いに愛し、互いに祈り、互いに仕え合い、一つとされた御体を形成するのです。